

袴に対する現代のイメージ：
マンガにおける袴の描かれ方から考える

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2020-02-10 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 小出, 治都子, 熊谷, 伸子, 佐藤, 真理子 メールアドレス: 所属:
URL	https://osaka-shoin.repo.nii.ac.jp/records/4424

袴に対する現代のイメージ —マンガにおける袴の描かれ方から考える—

学芸学部 化粧ファッション学科 小出治都子
文化学園大学 熊谷 伸子
文化学園大学 佐藤真理子

要旨：袴は日本の伝統的な和装の一種である。しかし、現代において身近なものとして認識されていない。このような袴（和装）に対し、マンガではどのように描かれているのか。本稿では、マンガにおける袴の描かれ方から、現代の袴に対するイメージ形成について考察した。その結果、ストーリー展開と共に「着るのが大変」「動きにくい」から「姿勢が良い」「きれい」「貫禄がつく」へ、その認識が変わり、袴（和装）への憧れや、袴の実用性の高さを理解する描写が描かれていた。以上のことより、マンガ作品における袴着キャラクターの登場が、若い世代の袴イメージの一端を形成していると考えられる。

キーワード：袴、和装、伝統、クールジャパン、マンガ

はじめに

袴は、日本書紀にも記載のある伝統的な和装の一種である。筆者らはこれまで、袴の機能性や快適性、伝統的所作時に果たす役割等について検討すると共に、マンガに描かれた袴着キャラクターに着目してきた¹³⁾。そして、マンガに描かれる袴着キャラクターの分類と考察から、袴を着装することは“日本の伝統文化を受け継ぐ”イメージが強いことを報告した⁴⁵⁾。

ところが、袴を含め和装は日本の伝統文化を担うものであるにも関わらず、身近なものとして認識されているとは言いがたい。石田かおりはこのような現状について、次のように述べている。

和服が身の回りからなくなることで、和服に対する知識が「特別な」知識になってしまった。和服を着た人を見れば「和服を着ている」ということはわかって、それがどのようなものか、たとえば夏物か合のものか冬物か、どのような場にふさわしいものかなど、わからない状況である。和服には季節や場面^{マエ}による厳密なルールが存在することも、ほとんど知られていない⁶⁾。

和装であることは分かっても、その季節性や必要性などは理解されることは少ない。ましてや、若年層にとって和装を着る機会などほとんどないだろう。このように、和装の文化が特別視されている中で、マンガにおいて和装はどのように語られているのだろうか。

マンガが研究対象になることについて、西上晴雄は「現代の若者文化の核はマンガである」とし、次のように述べている。

⁶⁾ 石田かおり『『和装文化論』授業における工夫について』『駒沢女子大学研究紀要 22』、2015年、p. 1

¹⁾ 佐藤真理子、伊豆南緒美、熊谷伸子、小出治都子「伝統的所作時に袴着が果たす役割」、日本家政学会第 67 回大会、2015 年 5 月『日本家政学会大会研究発表要旨集』、3P-43、p. 76

²⁾ 佐藤真理子、濱井風希、熊谷伸子、小出治都子「袴式ユニフォームの機能性と快適性に関する研究」日本家政学会第 68 回大会、2016 年 5 月『日本家政学会大会研究発表要旨集』、P-077、p. 70

³⁾ 佐藤真理子、熊谷伸子、小出治都子 (2016)「和装における袴の存在意義：市場の現状とマンガ分析、機能性検討、そして新たな可能性を探る」『ファッションビジネス学会誌』21、pp. 11-20

⁴⁾ 小出治都子、熊谷伸子、佐藤真理子「マンガに描かれる袴着キャラクターの分析」日本家政学会第 67 回大会、2015 年 5 月『日本家政学会大会研究発表要旨集』3P-58、p. 80

⁵⁾ 小出治都子、熊谷伸子、佐藤真理子「マンガによる袴のイメージ形成—『ちはやふる』と『信長協奏曲』からの考察—」日本家政学会第 68 回大会、2016 年 5 月『日本家政学会大会研究発表要旨集』P-084、p. 72

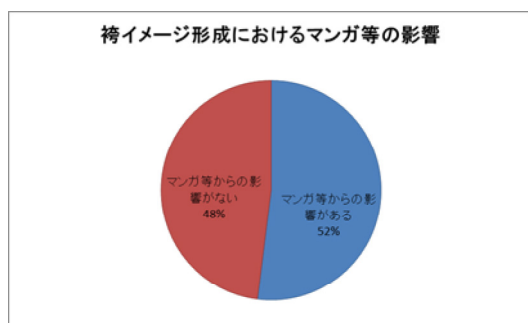
いまやマンガは印刷メディアだけでなく、いろいろなメディアに利用されているのであり、印刷物だけがマンガではなくなっているのです。芸術（美術、文学、演劇、映像、イベント etc.）分野、料理、スポーツ分野もマンガで理解し、報道や論説でさえマンガの感覚で見えています。マンガは彼等の共通言語であり、共通言語はその性格上、型通りであり、そこに警鐘を鳴らす人もいますが、メリットの方が断然大きいのです。まず直観的に意志が伝達できることが素晴らしいと思います⁷。

このように、若年層にとってマンガは身近なものであり、作者と読者、そして読者同士において意思伝達できるツールとして存在していることがわかる。そして、マンガを通し、さまざまな分野を理解できるということは、和装においても同じように、マンガから考えることができると言えるのではないだろうか。そこで、本稿ではマンガのなかの袴の描かれ方から、現代における袴のイメージ形成について考察する。

1. アンケート調査の実施

本研究を行なうにあたり、まず2015年11月に関西在住の大学生76名を対象に、質問紙による集合法でアンケート調査を実施し、袴のイメージ形成に影響を与えたと考えられるマンガの抽出を行った。質問内容は、「『袴』を知っているか」、「『袴』に対してどのようなイメージをもっているか」、「そのイメージはマンガ・アニメ・テレビドラマ・映画から影響を受けたか」などである。

その結果、袴のイメージ形成に対し、マンガ等の影響があったと答えた割合は52.0%であった。さらに、回答されたマンガタイトル総数は17であった。その



⁷ 西上晴雄「マンガ・アカデミー」『Artes: bulletin of Takarazuka University of Art and Design: 宝塚造形芸術大学紀要 19』、2006年、p. 73

中で回答数の多かったマンガは、『ちはやふる』、『信長協奏曲』、『るろうに剣心』、『ハイカラさんが通る』であった。そこで、本稿では『ちはやふる』と『信長協奏曲』の2タイトルを取り上げる。両タイトルは、どちらも現代の男性と女性が主人公であり、袴に対する考え方がセリフによって表現されている。そこで、両タイトルを考察対象とし、袴のイメージを抽出した上で分析を行った。

2. マンガにおける袴の描かれ方—『ちはやふる』の場合—

末次由紀原作の『ちはやふる』は2008年より『BE・LOVE』（講談社）にて連載中のマンガである。2011年に『ちはやふる』、2013年に『ちはやふる2』としてテレビアニメ化、2016年には『ちはやふる 上の句』、『ちはやふる 下の句』、2018年に『ちはやふる 結び』として実写映画化された。

『ちはやふる』の作品は次のように紹介されている。

まだ“情熱”って言葉さえ知らない、小学校6年生の千早。そんな彼女が出会ったのは、福井からやってきた転校生・新。大人しくて無口な新だったが、彼には意外な特技があった。それは、小倉百人一首競技かるた。千早は、誰よりも速く誰よりも夢中に札を払う新の姿に衝撃を受ける。しかし、そんな新を釘付けにしたのは千早のずば抜けた「才能」だった……⁸

主人公の綾瀬千早が才能を現した小倉百人一首競技かるたは、全国各地で大会が行われ、競技かるた人口は100万人を超えられている⁹。

小倉百人一首競技かるたの大会の服装は、和服着用のある大会もあるが、大抵はみな動きやすい服装で行っている¹⁰。『ちはやふる』では、名人戦もクイーン戦も袴着装であることから、主人公たちが所属している瑞沢高校かるた部も試合では袴を着装していることが多い。そのため、袴を着装しているシーンが描かれてい

⁸ 『ちはやふる』HP <https://be-love.jp/c/chihaya.html> (最終閲覧日：2019年9月29日)

⁹ 「全日本かるた協会について」一般社団法人全日本かるた協会HP <http://www.karuta.or.jp/gaiyou/index.html> (最終閲覧日：2019年9月29日)

¹⁰ 和装着用については、一般社団法人全日本かるた協会HP (<http://www.karuta.or.jp/faq/index.html>) のQ&Aに掲載されている。(最終閲覧日：2019年9月29日)

ることが多く、同時に登場人物の袴に対するイメージも描き出されている。

『ちはやふる』には、袴に対するイメージが3種類に分けて描かれている。1つ目は「袴に触れる前のイメージ」、2つ目は「袴を実際に着装したイメージ」、3つ目は「袴着装に対する他者からのイメージ」である。

2-1：袴に触れる前のイメージ

『ちはやふる』の2巻に、かるた部であるにも関わらず、なぜ袴を着装しないのかと主人公が聞かれるシーンがある。それに対して、「どうしてだろう。やっぱり高いから?」、「着るのが面倒なのはあるよなー」と答えている¹¹。また、6巻でも「着物は着たいけど面倒だし帯がきつくて嫌なのよー」という回想シーンも描かれている¹²。ここから、「袴(和装)=高くて着にくい=和装からの乖離」という構図となっていることが分かる。

また、28巻でも、「きれいだけど袴もやっぱ大変そー」というシーンがある¹³。この発言をした人物たちは全員Tシャツ姿であり、動きやすい格好をしている。彼女たちにとって、袴は見た目がきれいだが袴で動くのは大変であるという認識を持っていることがわかる。

これらは、袴の着装経験がない多くの者がもつ感想であると考えられる。着装経験がないものにとって、「動きにくい、窮屈である等といった『着ごち』的な理由と、ひとりでは着れない、着るのに時間がかかるという『手間』」¹⁴が大きな原因として、袴を含め和装へのマイナスイメージが作られていると思われる。

2-2：袴を実際に着装したイメージ

『ちはやふる』6巻には、登場人物たちが袴を実際に着装したときの様子が描かれている。呉服屋の娘である大江奏は普段から和装に慣れているためか、競技かるた大会で袴を着装している姿も凛とした描写になっており、歩く姿も楚々としている。さらに、「着物はいつも姿勢よくおなかを締めて胃と背骨の間に板を一枚入れた感じで」というセリフとともに、奏自身が「帯は私を支えてくれる。私の真ん中を強くしてくれ

る」と述べることで、和装が背筋を伸ばし、精神的にも気持ちを支えるものとして効果があることが描かれている¹⁵。このシーンから、袴を着装したプラスイメージが効果的に演出されていることがわかる。

また、10巻では瑞沢高校かるた部の女子部員である花野董が初めて袴を着装した感想として、「きれい…うれしい…」と述べている¹⁶。このシーンは、試合でのユニフォームとして袴を着装する瑞沢高校かるた部の一員として認められたことを示すものであり、袴が日常的に着装されない分、非日常性をもったものとして描かれている。

このように、身体的な変化のみならず、気持ちをも変化させる袴着装の影響力の大きさを描写されているのである。

2-3：袴着装に対する他者からのイメージ

袴着装に対する他者からのイメージが分かる描写は、まず4巻で描かれている。このシーンは、主人公たちが袴姿でかるた選手権大会の予選に出場したことに對し、新聞で「全国でも珍しい袴姿」であるとし、「凛々しい」と評価されている¹⁷。

では、実際に袴を着装した人物を見た他者はどのように感じているように描かれているか。6巻では、袴を着装した大江奏の様子に対し、「ステキ。あんなふうに動けるなら私だって……」「きれい」という感嘆の声が描かれている¹⁸。袴を日常的に着装していないからこそ、「動きづらい」ものとして認識していたものの、袴を着装した人物がかるたを自由に取っているのを目の当たりにすると、それだけ自由に動けるなら、という認識の変化を描いている。また、「やっぱりいいわね。着物は」というセリフを言っているのは年配の女性である。若年層と違い、和装の華やかさを再認識したかのような表現となっている。

さらに、奏の袴姿の凛々しさを見た主人公は「すごい。いっこいっこの動きがちゃんとしてる」と述べながら自身の居住まいを正しており、袴着装の姿は他者に影響を与えていることがわかる¹⁹。

9巻での新入生へのクラブ紹介では、「日本人なら誰もが持つ和装への憧れさえも喚起させる!!」とし

¹¹ 末次由紀『ちはやふる』2巻、講談社、pp. 172-173

¹² 末次由紀『ちはやふる』6巻、講談社、p. 80

¹³ 末次由紀『ちはやふる』28巻、講談社、p. 151

¹⁴ 井出幸恵・磯井佳子・風間健「和服着用の好き嫌いに及ぼす要因の解明 婦人和装外着の場合：一婦人和装外着の場合一」『繊維製品消費科学 35(7)』、1994年、p. 370

¹⁵ 末次由紀『ちはやふる』6巻、講談社、pp. 80-81

¹⁶ 末次由紀『ちはやふる』10巻、講談社、p. 10

¹⁷ 末次由紀『ちはやふる』4巻、講談社、p. 63

¹⁸ 末次由紀『ちはやふる』6巻、講談社、p. 84

¹⁹ 末次由紀『ちはやふる』6巻、講談社、pp. 78-79

て主人公たちが袴を着装している。それに対し、「着物だ着物!」、「かわいい」などの感想が述べられている²⁰。

さらに、28巻では急に袴を着装した1年生部員が「私はうれしいけど…急に袴とか大丈夫? (論者註: かるたを) 取れる?」と話しているシーンがあり、袴が日常的なものではないため戸惑っている様子が描かれている²¹。

このように、『ちはやふる』では精神的な効果や他者からの視線とともに、袴の非日常性が多く表現されているのである。

3. マンガにおける袴の描かれ方—『信長協奏曲』の場合—

石井あゆみの『信長協奏曲』は2009年より『ゲッサン』(小学館)において連載中のマンガである。2014年にテレビアニメ化、テレビドラマ化され、2016年には実写映画化された。『信長協奏曲』はホームページで次のように紹介されている。

ごくごく普通の今どき高校生サブロー。そんなサブローがひょんなことから飛ばされたのは、なんと戦国時代! そう、彼はタイムスリップしてしまったのである。自分の人生に日本の歴史なんてこれっぽっちも関係ないと思っていたサブロー。そんな彼がこの時代で出会ったのは、あの織田信長であった。歴史上とは似ても似つかないほど病弱な信長に、更に驚くべき頼み事をされる。それは、信長とサブローが入れ替わることであった…乱世で生きることとなってしまった平成育ち信長の、奔放奮闘記!!²²

現代に生きている主人公のサブローがタイムスリップしたことで、戦国時代の生活を送ることとなる。それに伴い、服装も戦国時代のものとなる。当時の服装については、次のように記されている。

武家の正装であった直垂から大紋・素襖と次々と簡略な服装が作られたが、やがてそれぞれが儀式の用となるに従い、平素には素襖の袖を省いた肩

衣に袴をはき、小袖を下につけた姿となり、それも又平素のものとはいいながら正装のうちに入ることとなる²³。

このように、戦国時代の武将たちは袴をはいているため、日常的に着装している場面が多く登場する。その中で、現代から来たサブローにとって袴は非日常性のものであり、そこに現代の若年層にとって袴とはどのようなものかが浮き彫りになってくる。

『信長協奏曲』には袴のイメージを4種類に分けて描かれている。1つは「主人公が初めて袴を着装した際のイメージ」、2つ目は「主人公が袴を着装していないことに対する他者からのイメージ」、3つ目は「主人公が日常的に袴を着装するようになる際のイメージ」、4つ目は「主人公が袴を着装したことに対する他者からのイメージ」である。

3-1: 主人公が初めて袴を着装した際のイメージ

主人公が戦国時代にタイムスリップしたことにより、服装も戦国時代のものへと変わることとなる。そのシーンを描いているのが1巻で描かれている。

しかし、袴を着装したことがない主人公にとって初めて着装した袴は「動きにくい」ものであり、すぐに脱いでしまう²⁴。そのため、丈の短い着物を着装した姿で過ごすこととなる。そして、主人公にとって袴は「動きにくいもの」と認識するものとして、それ以降3巻まで日常的に袴を着装するというシーンは描かれないまま話は進んでいくことになる。

3-2: 主人公が袴を着装していないことに対する他者からのイメージ

舞台である戦国時代において、袴を着装することは「日常的」なことであり「当たり前」であると表現されている。そのため、主人公が袴を着装していないことは「ありえない」ことであり、「だらしない身なり」とであると描かれることとなる²⁵。

主人公が袴を着装する15話までに、さまざまな人物から袴を着装していないことに対し、「だらしない」、「ふざけた格好」といった主人公へのマイナスイメージが表現されている。

²⁰ 末次由紀『ちはやふる』9巻、pp. 70-71

²¹ 末次由紀『ちはやふる』28巻、講談社、p. 116

²² 『信長協奏曲』HP <https://gekkanSunday.net/series/nobunaga> (最終閲覧日: 2019年9月29日)

²³ 『風俗博物館』HP http://www.iz2.or.jp/fukushoku/f_disp.php?page_no=0000100 (最終閲覧日: 2019年9月29日)

²⁴ 石井あゆみ『信長協奏曲』1巻、小学館、p. 15

²⁵ 石井あゆみ『信長協奏曲』1巻、小学館、p. 21

このように、『信長協奏曲』において、主人公が袴を着装していないことは「非日常的なこと」であり、「だらしない」ことであることが表現されている。

3-3：主人公が日常的に袴を着装するようになる際のイメージ

主人公が自らの意思で袴を着装した場面が描かれているのは3巻である。なぜ袴を着装しているのかを質問され、次のように答えている。

いや、俺もそろそろ衣替えしようかなーと思って。いつまでも足出してても、貫禄出ないでしょ？
ね？こーゆー格好のほうが貫禄出るでしょ。
戦国武将っぽいよね？²⁶

このセリフから、主人公にとって袴を着装することは「貫禄をつける」ためのものと考えていることがわかる。そして、その考えは、袴を日常的に着装する戦国時代に馴染んだものではないことが示されているのである。

さらに、袴を着装することは、主人公にとって精神的に大人になることと考えているような描写であったことがわかる。そのため、貫禄をつけた落ち着いた戦国武将に見えることができるアイテムとして袴を着装していると考えることができよう。

3-4：主人公が袴を着装したことに対する他者からのイメージ

袴を着装した主人公は自身に「貫禄がついた」と考えているが、周りにいるものたちにとっては袴を着装することが日常的であるため、「貫禄がついた」とは考えておらず、むしろ主人公が突然袴を着装したことに驚いている。さらに、主人公が貫禄をつけるために袴を着装したことに対し、「貫禄…貫禄…殿はどんな格好をしても、いつもの殿でございますよ。」と述べている²⁷。袴姿が日常的な戦国時代において、袴を着装したことによる精神的な成長は感じるものではないことが描かれている。

しかし、袴を着装し外見を改めることは、行動が落ち着くものと考えているような描写はある。つまり、主人公が考えるような精神的な成長は見られないものの、袴を着装することによる行動の落ち着きは得られ

るものと考えられた描写であることがわかる。

このように、袴を着装することは現代を生きる主人公にとって身体的な変化のみならず、精神をも変化させる影響力の大きいものとして考えられているのである。

おわりに

以上のように、マンガによって袴がどのようなイメージを表出しているかを考察した。

まず『ちはやふる』における袴は、プラスイメージとして「憧れ」や「姿勢が良い」といったものである。それに対し、マイナスイメージとして「着るのが面倒」や「大変」といったものがあった。そして、『ちはやふる』において袴を着装すること自体が「非日常のもの」であることを示している。

それに対し、『信長協奏曲』において袴は「日常的に」着装するものである。プラスイメージとしては、「貫禄」がつくもの、「きちんとした」格好であることである。マイナスイメージは「動きにくい」というものである。

これらのイメージは、袴を着装する機会が少ない若い世代に浸透するイメージであり、そのイメージがマンガによって表出されている。ストーリー展開と共に「着るのが大変」「動きにくい」から「姿勢が良い」「きれい」「貫禄がつく」へ、その認識が変わり、袴（和装）への憧れや、袴の実用性の高さを理解する描写が描かれているのである。

以上のことより、マンガ作品における袴着装キャラクターの登場が、若い世代の袴イメージの一端を形成していると考えられる。

本研究は、科研費 26350082（基盤C：袴の機能性研究－世界に発信する“Hakama is cool”－）の助成を受け、日本家政学会第68回大会で発表した「マンガによる袴のイメージ形成－『ちはやふる』と『信長協奏曲』からの考察－」を加筆修正したものである。

²⁶ 石井あゆみ『信長協奏曲』3巻、小学館、pp.164-165

²⁷ 同上